

[特別寄稿]

卒業研究と本とわたし

経済学部 塚本 恭章



勉強と研究は似ているようで異なる作業である。

むしろ「研究」の土台として「勉強」が必要となる。そのうえで「研究」には社会や世界についての主体的な問題関心と、それにもとづくテーマを見出し深く育んでいくエネルギーが欠かせない。それは教員が学生に与えるものではない。教員と学生の学問的な意思疎通を通じて、学生自身が発見、探究していくことが決定的に重要だ。難しい作業だが、それこそ大学生が今も昔も変わらず持ち続けるべき素養だろう。「卒業研究」は学生時代の最後に取り組むべく、いわば集大成的な営みにほかならない。「勉強」というものを超えた成長を経験できるきわめて貴重な機会ではないか。そして「本」は机上の空論を綴ったものではない。本は己の知識や思考の狭さを気付かせてくれる導きの糸であり、われわれは「本」を通じて「謙虚に学ぶ」ことができるのだ。

「分からなくても自分で考える。答えを知ったときの喜びがより大きくなる」。ガリレオこと湯川学・帝都大学准教授(福山雅治)主演の映画『真夏の方程式』に登場するセリフだ。理科嫌いの小学4年生の少年に発したこの言葉、年齢に関係なく真理を突くなかなかの名言だ。「分かる」ために必要となるツールは、現代においてわりと揃っている。あとはそれを効果的に活用できるかどうかだ。学生諸君はもっと大学の先生を活用し、ともに語らい大いに議論してよい。愛知大学の学生は確かな潜在性(=ポテンシャル)をもっているのだから。

せっかくなので自身の体験を記しておきたい。学部時代の

わたしは(学部の)懸賞論文に挑戦する所属ゼミの伝統を引き継ぐこととなった。3年次の早い段階からテーマ決めがおこなわれ、3年次が終了する頃には1つの形になっていた。当時の慶大ゼミは週2回の4コマあり、出席するだけでも相当な予習が必要だった(夏合宿は4泊5日、春合宿は2泊3日にて遠征)。数冊の専門書を鞆にいられて就活し、就活後も卒論への関心は続いていた。それは研究テーマへの愛着と懸賞論文の審査のパスという強い想いがあったからだろう。3倍近い審査のパスは容易でない。新進気鋭の若手教員の手厳しくも的確な疑問の数々をクリアし、納得させなければならぬ。指導教授、院生、ゼミメンバーなど皆がわたしをバックアップしてくれた。そのときの学術論文がわたしのデビュー作となった。翌年、非常勤で来られた伊藤誠先生(現在東大名誉教授)との出逢いと交流のきっかけをつくってくれたのもこの論文だ。そこから20年以上の月日が経つが、審査原稿とコメントは今も手元にきちんと残してあり、なにかに行き詰ると眺め返したりする。「知」というものを真摯に探究した原点がそこに刻まれており、それはけっして色褪せない。「時(とき)」の速度と深度が鮮やかな感慨を生む。

大学環境も年々厳しくなっている昨今だが、時代に適応しながら「変えて」いくものと、「変えず」に守っていくべきものがある。「本」を読み、「卒論」を書くこと、わたしにはもっとも大学生らしいと実感できる営みだ。卒業研究は<基本>を学びながら<既存>を超える試みなのだ。ぜひ多くの学生が卒業研究に挑んでほしい。

特集

